シネマ探訪

１ さかな屋キネマで「百円の恋」を観る

和田正則

神奈川県藤沢市に「さかな屋キネマ」という自主上映会をやっているグループがある。主催者は本当のさかな屋さんでその店の二階でやるのだ。普段は食堂になっているが日曜日は休みなのでそこを映画館にする。３０人程度が入れるスペースである。昨年夏にそこで第二回目となる上映会が開かれた。午前と午後の二部構成となっている。ぼくは、藤沢に住む友達を誘って午後の部に出かけた。いささか古い話で恐縮ですがそのことについて書いてみる。

上映作品は『百円の恋』（監督：武正晴　脚本：足立紳　主演：安藤サクラ、新井浩文）である。ちょうど見損なっていたのでこれ幸いと思ったのである。この映画の脚本は、「第一回松田優作賞」グランプリに輝いた作品である。松田優作賞というのは、松田優作の生まれ故郷である山口県にある周南市で行われる映画祭にある賞で、優秀な脚本に対して贈られる。

この脚本が素晴らしい。だから映画も大変良く出来ているストーリーは３２歳の一子（安藤サクラ）という女性が主人公で弁当屋を営む実家でだらしない生活を送っているところに離婚した妹が子供を連れて戻ってくる。姉のだらしなさをなじる妹とけんかをしてしまい家を出てひとり暮らしを始める。そして近所の１００円ショップで働くことになる。

そんな生活の中、行き帰りの道に面したところにあるボクシングジムで練習する狩野（新井浩文）に目が行く。そして狩野が一子の店に客として来たのをきっかけに付き合いが始まり一緒に暮らすようになる。ただ、この男もだらしがなく別の女のところに行ってしまう。一人となった一子は今度は自分がボクシングジムに通うことになる。そして、何とボクサーを目指して練習に励むのだ。

こうして、一子はボクシングに打ち込むことで自堕落な自分からおさらばしていくのだ。てな、展開なのだが、最初はでぶでぶで不健康な一子が徐々にしまった身体になって強く成長していく姿を安藤サクラが体当たりの演技でものの見事に演じている。受ける新井浩文もいいのだが、安藤サクラの演技力に圧倒されっぱなしになる。これだけで

も観る価値がある。もちろん、彼女の演技力を発揮させた監督、脚本家、共演者たちも素晴らしいことは言うまでもない。

この日は驚いたことに監督の武正晴さん本人が駆けつけてくれたのである。ドイツのフランクフルトからこの上映会のために抜けだして直接来たのだそうでびっくりだ。映画が終わった小一時間のトークショーを行ってくれた。これが面白かったのだ。なかなか聞けない裏話が満載で、また監督の愉快な話ぶりもあって大いに楽しんだ。

その時の話をいくつか。この一子と言う女性を演じられる日本の女優さんは誰だ、と脚本を書いた足立さんと二人で考えたとき、ふたりとも安藤サクラでしょとなったそうだ。もし、彼女が受けてもらえなかったらどうしようかと思って、いっそのこと韓国の話にしたらどうかとも検討したらしい。まあ、それは冗談として、安藤サクラがいなかったらこの映画化もなかったということなのだ。

さらなる驚きは一子の肉体がみるみる変わっていくのだが短期間（撮影は3ヶ月くらいのようだ）であれだけの変化を表現できる安藤サクラの女優魂にも脱帽だ。ところが体重がどうのこうのというのは一切気にしていなかったそうだ。それより、見え方、見せ方の問題だったという。

例えば、予算がなかったので室内のシーンは一日で撮ったということなのだが、そこにデブデブの一子とボクシングで絞り上げた一子がいるのだ。つまり肉体が変化したビフォーアフターを一日で表現してしまったのだ。それを聞くまでは映画ではだいぶ期間があって一生懸命絞って撮影に臨むんだと思っていたからびっくり仰天だ。このことだけでもアメージングである。他にも面白い話が盛りだくさんあったがこのへんで。

この上映会は今年の2月で10回を数える。月1回くらいのペースだからたいしたものだ。関係者の方々の努力に頭が下がる。本当に映画が好きなんでしょう。